

## 中学生における学校不適応と信頼感に関する研究

佐藤寿仁\*・菅原正和\*\*

(2007年2月5日受理)

Toshihito SATO and Masakazu SUGAWARA

Maladaptation and Trust in Junior High School Students

### I 問題と目的

近年の不登校問題は、いじめ (Bullying) と同様わが国の大きな社会問題となっており、事態は深刻である。文部科学省の学校基本調査 (2004) の平成 16 年度学校基本調査の報告によれば、不登校児童生徒数は平成 16 年度のデータで約 13 万人である。中学校での出現率は 2.7 0 % で、即ち学級に 1 人はいることになる。岩手県においても他県とほぼ同様の傾向にあり、県内不登校中学生は 1,331 名と報告されている。2 年前の調査報告と比較すると、見かけ上は 2 年連続で全国的に減少して見えるが、これは文部科学省が定める不登校の規準とした「30 日以上欠席」を満たす生徒が減少したためであって、不登校の根本的な解決には至っていない。なぜなら、学校での居場所をつくる目的で、空き教室、相談室、保健室へ登校をしている生徒が増加しているためである。

不登校に至る原因調査では、「学校生活に起因する」というのが小学生で 19%、中学生では 39.5% を占めている。特に中でも「友人関係をめぐる問題」の占める割合は高く、中学生では「学校生活に起因」の中で約 53% を占め、友人関係は何れも閉鎖的で仲のよい友達だけで固まり、他の子どもを排除するグループ行動が指摘され、学校生活における憂慮すべき問題となっている (牧・

高階, 1991)。また、教師との関係や部活動などの学校生活においても、対人関係で問題を抱えてしまう。かかる学校での対人的環境において生徒が不適応感をもち、移行的に不登校に至るケースが多い。

不登校問題を考えるとき、研究の対象は不登校や欠席の多い子ども達に向けられることが多く (本間, 2000)、不登校問題を、予防的介入の立場で行う研究はこれからますます必要になってくると思われる。欠席はしないものの、教室に入らず相談室、保健室にしか登校できない彼らは不登校児童・生徒にはカウントダウンされていない。森田 (1991) は、登校はしているものの適応できず、必死に我慢している子どもたちを不登校の潜在群として注目し、その群を不登校のグレイゾーンと呼んだ。この群に関する研究推進が不登校問題の解決を進めるだろうと述べている。石隈 (1999) は学校現場に対する「心理的援助サービス」の必要性を強調している。「心理的援助サービス」とは、子どもが課題に取り組む過程で出会う問題状況の解決を援助し、成長を促進することをめざすもので、「心理的援助サービス」は 3 段階で構成され、教師は一次的援助サービスの中心を担い、学校生活を通して発達上の課題や教育上の課題に取り組むうえで必要とする基礎的な能力の開発を援助するサービスをさす。学校不適応を予防

する具体的な方策としては、「構成的グループエンカウンター (SGE)」、「ピア・サポート」、「ロールプレイング」、「対人関係ゲーム」等があり、いずれも対人関係スキルの向上を主目的としている。これらを学校現場で実践し、それぞれの予防的効果がいくつか報告されるようになった。四杉 (2003) は、構成的グループエンカウンター (SGE) を小学生に実施し、そのプログラムが友人サポートを高め、心理的なストレスや不適応感を軽減したことを報告している。かかる支援のなかで、子ども達はこれから出会う問題に取り組む能力をつけ、問題を乗り越えながら成長する。そして直面する課題が子どもの心理的発達を妨害するほど重大にはならないようにすることを目指しており (石隈, 1999) 予防的介入には大きな意義がある。

先行研究は、不登校の背景には学校生活での対人関係の問題が存在すること、そして予防的援助の必要性やその効果を指摘してきた。新学習指導要領が施行され、教育課程が大きく変化し、学校環境も少しずつ変化をしている。なかでも深刻さを増す不登校問題に歯止めをかけるためにも、担任教師は学校不適応への予防的介入を促進させる必要がある。教師は単に対人関係を促進させるプログラムを施すことだけに力点を置くのではなく、子ども達が自らの力で問題を解決するためにも、不登校のグレイゾーンに注目し、学校環境への適応、不適応の状況を分析、把握していくことが必要不可欠である。適切なプログラムを教育課程内で迅速にすすめる必要があり、このことが学校不適応、不登校問題解決の手がかりとなると考えられる。今日の子供達は自尊感情が低く仲間として受け入れることに自信が持てず、他人とかわることや集団の中で積極的に活動することを回避する (田上, 2003)。自分自身にもしくは他者に対してもつネガティブな世界は、学校生活 (実際の世界) に強く影を落としている。天貝 (1996, 2001) は、中学生がもつ信頼感とは人との心理的距離に関連があることを指摘する。本研究は、中学生における学校への適応感の現状を把握し、中学生のもつ信頼感、不信感と学校適応

感の関わりを検討する。

## II 方 法

**調査対象：**A 県内公立中学校 6 校の 1 学年から 3 学年の 42 学級の生徒、1,363 人を対象として調査を実施した。有効回答は 1,277 人 (有効回答率 93.7%) であった。

**調査時期：**2003 年 10 月下旬～11 月上旬。

**測定方法：**学校適応の測定に、学校環境適応感尺度 (内藤・浅川・高瀬・古川・小泉, 1987) を使用した。回答は、それぞれの項目に対して、「よくあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」を選択する 4 件法。本尺度は「進路意識」、「友人関係と態度」、「きまりへの態度」、「特別活動への態度」、「教師との関係」、「学習への態度」の 6 つの下位尺度で構成されている。回答値の合計点が「学校適応感得点」となり、得点が高いほど「学校適応感」が高いと判断される。

信頼感の測定には「信頼感尺度 (天貝, 2001)」を使用。回答は、それぞれの項目に対して、「非常によくあてはまる」「あてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」、「まったくあてはまらない」のいずれかを選択する 6 件法。本尺度は「自分への信頼」、「他人への信頼」、「不信」の 3 つの下位尺度で構成されている。各下位尺度回答値の合計点が「自分への信頼感得点」、「他人への信頼感得点」となり、得点が高いほどが「自分への信頼感」、「他人への信頼感」が高いと判断される。また「不信得点」については得点が高いほど、「不信」が高いと判断される。

**手続：**A 県内県北地区 K 村、県中央地区 I 町、M 市、県中南地区 T 町、県南地区 I 町にある中学校に調査依頼し、承諾が得られた 6 校を調査対象とした。フェイスシートは、生徒の学年、性別のみとし、生徒の本音を引き出すために、本検査が学校の成績に関係がないこと、結果については統計的に処理され、個々の内容については、担任

教師や級友に検査結果が知らされないことを明示した。さらに、担任教師に実施手順を示すプリントを配布し、生徒に不安が生じないように配慮した。

### Ⅲ 結 果

#### (1) 各尺度の因子分析

本研究に使用した2つの尺度に関して、先行研究と同様の因子構造になっているか否かを確認するため探索的因子分析を行った。中学生の抱く学校適応感の実態はどのようになっているかを検討するため、「学校環境適応感」のデータを主因子法により分析した。回転軸に関しては、因子が独立していることが想定されたので、直交回転（バリマックス回転）で行った。その結果先行研究通り6つの因子が抽出された（Table 1）。因子負荷量0.4以上の因子32項目についての因子の特定ができ、累積寄与率は50.77%であった。第1因子は、中学校卒業後の職業選択、進学への関心や考え方に関わる質問項目に関連が深いので「進路意識」と命名した。第2因子は、交友関係や交友間での態度に関わる質問項目に関連が深いので「友人関係と態度」と命名した。第3因子は、学校生活上での規則に関わる質問項目に関連が深いので「きまりへの態度」と命名した。第4因子は、部活動、学級、生徒会活動、学校行事に対する態度に関連する質問項目に関連が深く「特別活動への態度」と命名した。第5因子は、教師への態度や接し方に関連するので「教師との関係」と命名した。第6因子は、学習や学校の授業に関連するので「学習への態度」と命名した。本尺度の信頼性について、Cronbachの $\alpha$ 係数は全体では0.92、第1因子は0.86、第2因子は0.84、第3因子は0.82、第4因子は0.85、第5因子は0.83、第6因子は0.74であり、十分な整合性があると考えられる。

次に、中学生の抱く信頼感の実態はどうなっているのかを把握するため、「信頼感」のデータを主因子法により、因子分析を行った。回転軸に関しては、因子が独立していることが想定された

ので、直交回転（バリマックス回転）で行った。その結果ほぼ先行研究通り、3つの因子を抽出した（Table 2）。因子負荷量が0.4以上の因子を24項目のうち22項目についての因子の特定ができた。ただし、第14項目については負荷量0.4を下回っている。これは質問紙の文章の理解が調査対象となった中学生には若干困難であったと考えられ不安定項目となっている（例えば、第12, 14項目）。累積寄与率は39.2%であった。第1因子は、他者に対してのネガティブな思いや疑い、また自分自身を信じていることができないなどに関連が深いので「不信」と命名した。第2因子は、他者に対しての信頼感に関連があり「他人への信頼」と命名した。第3因子は、自分に対しての信頼感に関連が深いので「自分への信頼」と命名した。この尺度の信頼性については、Cronbachの $\alpha$ 係数は全体では0.73、第1因子は0.83、第2因子は0.83、第3因子は0.73であり、十分な整合性があると考えられる。

#### (2) 信頼感の因子ごとの得点の性差と学年差

信頼感各因子得点の性別、学年差と交互作用を分析するために、性×学年の分散分析を行った。カテゴリー間に有意差があるものはTukey法で多重比較を行った。「不信」では性差、学年差ともに有意差はみられなかった。「他人への信頼」では性差（ $F(1,1271) = 10.28, p < .01$ ）および学年差（ $F(2,1271) = 6.15, p < .01$ ）の双方に有意差がみられた。男子より女子の方が、また2年生より、1、3年生の方が得点は高かった。「自分への信頼」では性差、学年差に有意差はみられなかった（Table 3）。

#### (3) 信頼感に関する「学校適応感」因子への重回帰分析結果

中学生のもつ信頼感が「学校適応感」に及ぼす影響を検討するために、信頼感各因子得点を独立変数、学校環境適応感の各因子の得点を従属変数として重回帰分析を全学年、学年別に行った。その結果をTable 4～7に示す。

Table 1 学校環境適応感尺度の因子分析結果

	進路意識	友人関係 と態度	きまりへ の態度	特別活動 への態度	教師との 関係	学習への 態度
4 自分の進路目標は、はっきりとしている	.737	.088	.036	.101	.069	.020
31 自分にあった進路を考えている	.715	.162	.130	.086	.128	.115
14 進路について真剣に考えている	.706	.084	.159	.117	.087	.060
19 将来なりたい職業を決めている	.657	.153	-.010	.069	.072	-.001
28 自分の将来に希望をもっている	.617	.261	.110	.192	.107	.141
23 進路についてよく調べる	.597	.042	.127	.128	.159	.171
10 自分には、多くの友人がいる	.062	.726	.060	.212	.099	.026
15 自分は性格的に明るい方である	.153	.657	-.057	.145	.172	.038
24 楽しい友人関係をもっている	0.10	.653	.106	.181	.085	.012
29 人あたりがよく、人と積極的につきあおうとする	.245	.622	.033	.262	.205	.164
5 悩みなどを話せる友達がいる	.118	.567	.028	.169	.147	-.057
20 自分はユーモアのある人間である	.141	.560	-.007	.097	.217	.171
17 学校のきまりを守るという自覚を持っている	.143	.101	.769	.163	.105	.087
13 自分で意識なくても、学校のきまりを守る方だ	.100	.036	.739	.148	.046	.137
2 学校のきまりをまじめに守っている	.059	-.018	.692	.158	.077	.109
7 学校のきまりはあたりまえだと思う	.086	.033	.607	.143	0.20	.112
22 学校のきまりに対して不満はない	.056	-.009	.461	.085	.203	.212
3 部活動、学級活動、生徒会の行事に積極的である	.163	.236	.140	.708	.121	.047
36 部活動、学級活動、生徒会の行事をなまげない	.131	.127	.240	.646	.153	.085
18 部活動、学級活動、生徒会の行事が楽しい	.113	.280	.162	.601	.242	.068
27 学級活動、生徒会の行事に自主的に参加している	.149	.234	.226	.575	.178	.188
9 学級活動や生徒会の行事には協力的である	.170	.275	.225	.571	.233	.122
34 部活動に充実感をもっている	.101	.193	.071	.486	.130	.087
8 友達のように親しみを感じる先生がいる	.072	.202	.091	.208	.673	-.017
16 何でも相談できる先生がいる	.143	.178	.158	.116	.657	.058
35 先生と話す機会を自分で持とうとしている。	.186	.167	.193	.194	.651	.188
25 この学校の先生を信頼している	.126	.144	.367	.174	.496	.159
1 学校の先生と気軽に話せる	.079	.317	.072	.192	.461	-.002
32 先生によく質問をする	.176	.188	.132	.169	.449	.271
26 ある程度勉強はできる方だ	.076	.071	.174	.118	.066	.701
21 授業をよく理解している	.152	.066	.286	.140	.078	.676
33 勉強が楽しいと思う	.211	.047	.290	.116	.261	.470
固有値	3.20	3.14	2.92	2.81	2.57	1.60
寄与率(%)	10.01	9.81	9.13	8.77	8.04	5.01
累積寄与率(%)	10.01	19.82	28.95	37.72	45.76	50.77

Table 2 信頼感尺度の因子分析結果

	不信	他人への信頼	自分への信頼
8 結局、まわりには敵ばかりだと感じる	.651	-.304	-.028
22 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが恐くなってきている	.650	-.058	-.119
17 気をつけていないと、人は私の弱みにつけこもうとするだろう	.644	-.063	.0535
19 私はなぜか人に対して疑り深くなってしまふ	.600	-.086	.037
5 いま、心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う	.596	-.090	-.130
15 今は何とか話せても、他人などまったく当てにならないものである	.537	-.237	.124
9 まわりのほとんどの人は私を信頼してくれてはいないだろう	.532	-.224	-.198
21 自分で自分をしっかり守れていないと壊れてしまいそうな気がする	.508	.151	.003
13 人は自分のためならかんたんに相手を裏切ることができる	.477	-.126	.023
11 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ	.451	.014	.059
3 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う	-.192	.690	.276
4 これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる	-.231	.685	.142
2 無理をしなくてもこの先の人生で私は信頼できるような人と出会えるような気がする	-.088	.619	.300
1 これまで出会ったほとんどの人は私によくしてくれた	-.177	.609	.135
7 私には現実には信頼できる特定の他人がいる	-.014	.591	.107
20 一般的に、人間は信頼できるものだと思う	-.235	.542	.205
23 状況が許せば、たいいてい人間はお互い正直に、かつ誠実にかかわりあいたいと思っているだろう	.0327	.466	.259
16 私は、自分自身を、ある程度信頼できる	-.021	.181	.770
18 私は、自分自身が信頼に値する人間だと思う	-.002	.271	.609
12 私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする	-.091	.403	.449
24 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもっている	-.008	.344	.424
14 私は私で、決して他人にとってかわることのできない存在であると思う	.113	.281	.366
<b>固有値</b>	<b>3.45</b>	<b>3.29</b>	<b>1.90</b>
<b>寄与率(%)</b>	<b>15.66</b>	<b>14.94</b>	<b>8.63</b>
<b>累積寄与率(%)</b>	<b>15.66</b>	<b>30.6</b>	<b>39.2</b>

全学年の「友人関係と態度」では「他人への信頼」が、強い正の予測子として検出され、「不信」が負の予測子として検出された。「特別活動への態度」では「他人への信頼」が正の予測子として検出され、「教師との関係」では「他人への信頼」が正の予測子として検出された。「学習への態度」では「自分への信頼」が正の予測子として検出された。

第1学年の「友人関係と態度」では、「他人への信頼」が正の予測子として検出され、「不信」が負の予測子として検出された。「特別活動への態度」では「他人への信頼」、「自分への信頼」が正の予測子として検出された。「教師との関係」では「他人への信頼」、「自分への信頼」が正の予測子として検出され、「学習への態度」では「自分への信頼」が正の予測子として検出された。

Table 3 信頼感の平均点、および標準偏差と分散分析結果

	1年生		2年生		3年生		分散分析結果		
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	性差	学年差	交互作用
	(n=242)	(n=229)	(n=201)	(n=183)	(n=220)	(n=202)	F	F	F
不信	31.83 (9.62)	32.87 (9.05)	31.84 (8.58)	33.85 (9.18)	32.79 (9.91)	32.13 (9.22)	2.36n.s	0.32n.s	2.14n.s
他人への信頼	29.51 (6.56)	29.88 (5.74)	27.66 (6.55)	29.10 (5.97)	28.94 (5.93)	30.44 (5.85)	10.28** (女子>男子)	6.15** (1年・3年>2年)	1.22n.s
自分への信頼	19.91 (4.63)	19.15 (4.18)	19.23 (4.69)	19.14 (4.27)	19.30 (4.62)	19.13 (4.58)	1.76n.s	0.79n.s	0.72n.s

\*\*\*p&lt;.001, \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05

Table 4 学年における学校適応感各因子得点の信頼感尺度の得点の重回帰分析結果

	進路意識	友人関係と態度	きまりへの態度	特別活動への態度	教師との関係	学習への態度
不信	.079**	-.078***	-.007n.s	-.050*	-.002n.s	-.032n.s
他人への信頼	.248***	.539***	.191***	.441***	.382***	.122***
自分への信頼	.199***	.192***	.145***	.140***	.172***	.287***
重相関係数	.388	.694	.302	.551	.502	.378
決定係数	.150	.482	.092	.303	.252	.143

\*\*\*:p&lt;.001 \*\*:p&lt;.01 \*:p&lt;.05

Table 5 1学年における学校適応感各因子得点の信頼感尺度の得点の重回帰分析結果

	進路意識	友人関係と態度	きまりへの態度	特別活動への態度	教師との関係	学習への態度
不信	.820 n.s	-.133***	-.046 n.s	-.084*	-.011 n.s	-.032 n.s
他人への信頼	.149**	.467***	.210***	.360***	.338***	.174**
自分への信頼	.282***	.242***	.140**	.214***	.205***	.254***
重相関係数	.377	.691	.329	.546	.489	.391
決定係数	.142	.477	.102	.293	.239	.153

\*\*\*:p&lt;.001 \*\*:p&lt;.01 \*:p&lt;.05

第2学年の「友人関係と態度」では、「他人への信頼」が正の予測子として検出され、「きまりへの態度」では「他人への信頼」が正の予測子として検出された。「特別活動への態度」では「他人への信頼」が正の予測子として検出され、「学

習への態度」では「自分への信頼」が正の予測子として検出された。

Table 6 2学年における学校適応感各因子得点の信頼感尺度の得点の重回帰分析結果

	進路意識	友人関係と態度	きまりへの態度	特別活動への態度	教師との関係	学習への態度
不信	.049 n.s	-.015 n.s	-.001 n.s	-.030 n.s	.033 n.s	-.055 n.s
他人への信頼	.260***	.596***	.204**	.534***	.362***	.063 n.s
自分への信頼	.188**	.162***	.175**	.120*	.175**	.367***
重相関係数	.396	.707	.338	.620	.482	.415
決定係数	.157	.500	.114	.384	.232	.172

\*\*\*:p<.001 \*\*:p<.01 \*:p<.05

第3学年の「進路意識」では「他人への信頼」、「自分への信頼」が正の予測子として検出された。「友人関係と態度」では、「他人への信頼」が正の予測子として検出され、「不信」が負の予測子として検出された。「特別活動への態度」では「他

人への信頼」が正の予測子として検出された。「教師との関係」では「他人への信頼」、「自分への信頼」が正の予測子として検出され、「学習への態度」では「自分への信頼」が正の予測子として検出された。

Table 7 3学年における学校適応感各因子得点の信頼感尺度の得点の重回帰分析結果

	進路意識	友人関係と態度	きまりへの態度	特別活動への態度	教師との関係	学習への態度
不信	.099*	-.085*	.022 n.s	-.054 n.s	-.029 n.s	-.011 n.s
他人への信頼	.326***	.542***	.146*	.408***	.411***	.108 n.s
自分への信頼	.169**	.170***	.125*	.095 n.s	.156**	.255***
重相関係数	.430	.686	.238	.489	.527	.322
決定係数	.185	.470	.056	.239	.278	.110

\*\*\*:p<.001 \*\*:p<.01 \*:p<.05

#### IV 考察

##### (1) 中学生のもつ信頼感の実態

信頼感の各因子「不信」、「自分への信頼」については性差、学年差はみられなかった。猿渡(2003)は、同じような中学生の信頼感を調査しており、「不信」については性差、学年差はなかったと報告している。本研究もこのことを指示する結果となった。天貝(2001)はこのことについて、「不信」は量の変化が学年ではなく、個人の発達の差異によっていること、あるいは、量そのものの個人差が大きく、それ自体余り変化しな

いとしている。

「自分への信頼」では、性差、学年差がみられず、猿渡(2003)の先行研究とは異なる結果となっている。「自分への信頼」は高1で減少がみられるものの、ほぼ一貫した増加を示す(杉原、天貝, 1996)。青年期には、自分の存在や価値について見つめ、理解し、自分自身を形成して行くが、中学生の段階では大きな成長は見られず、自分のことよりも他人の姿や存在が気になっている。

「他人への信頼」では性差、学年差ともにみとめられた(Figure 1)。性差では、男子よりも

女子のほうが有意に高く、これは猿渡（2003）の報告を支持している。学校適応感において、友人関係では男子より女子のほうが適応感が高く、他者との心理的距離を示していると考えられ、心理的距離の短縮は他者に対しての受け止め方や考

え方を緩和し、接近させられると思われる。また、中学生女子にとって、友人関係が依存的であるならば、他者との関係を持つために「他人への信頼」を持たずにはいられない状態にあると考える。

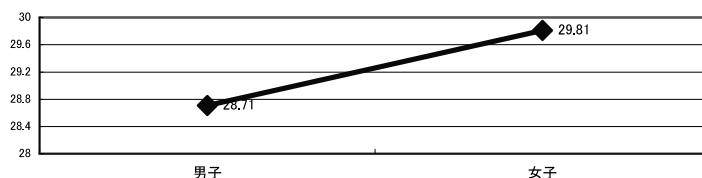


Figure 1 「他人への信頼」の性別による平均値

次に学年差を Figure 2 に示す。「他人への信頼は」青年期に、増加していく（天貝，2001）といわれており、中学2年生での落ち込みについてはこれに該当しない。この指摘は猿渡（2003）も行っている。「他人への信頼」は他者との経験や体験によって大きく変動すると考えられる。2年生では、1年生のときよりも緊張感は緩和し、他者との交わり方にも変化が生じてくるのだろう。そうした変化の中で、他者への見方や感じ方も変わってくると考えられる。青年期前期には、

容姿や級友内だけでの人気を重視する傾向が強くなる結果、それだけ周囲の評価に対しては敏感である（小泉，1995）。自分がどうであるのかという自己内省は少なく、他者からどう見られているのかを気にするあまり、他者に対してフィルターを通した見方をすることで、相手の人格をありのままに受け止められないでいる。学校適応感と同様に、2年生という学年は「他人への信頼」の発達の節目になっているのであろう。

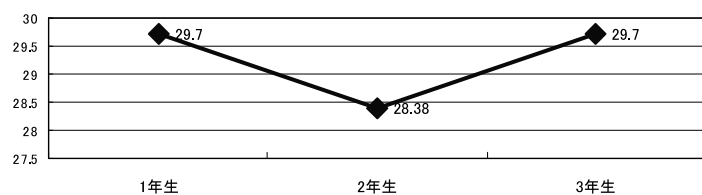


Figure 2 「他人への信頼」の学年による平均値

## (2) 中学生がもつ信頼感の学校適応感への影響

信頼感が学校適応感に及ぼす影響を検討し、学年の発達の特性をみるために、「全学年」、「第1学年」、「第2学年」、「第3学年」で重回帰分析を行った。

「進路意識」には他人への信頼、自分への信頼の両方が影響を及ぼしている。特に他人への信頼の影響力が大きく、中学生の進路選択については、将来の具体的な選択よりも、漠然とした職

業選択からはじまり進学先の選択が中心となっている。親、教師、友人の話から進路を絞り込むために自分自身の問題ではあるが他者からの情報に依存している。天貝（2001）は中学生の進路と信頼感の関連性はあまりないとしており、本研究と異なる結果になっている。進路は自己を確立していく高校生に影響するとされているが、中学生には先にあげた理由により、他人への信頼感が影響している。



「友人関係と態度」、「教師との関係」には他人への信頼が強く影響していることがわかる。中学生においては、他人とのふれあいや結びつきを通じて、自己の存在を強めていく傾向が強く、友人、教師との心理的距離の短縮と信頼感の増加が相互に循環して機能している（天貝，2001）と考えられ、他人への信頼が中学生の学校内での対人関係を構築するために時に大切になっている。「特別活動への態度」には「他人への信頼」が強く影響している。特別活動は一見個人的な活動に思えるが、その内容をみると、学級活動、生徒会活動と集団での行動、話し合いなどの活動が多くある。また部活動も、チームや団体に所属し、集団での活動が主となる。集団の中で活動するからには、そこには他者との交わりは必ず生まれ、他人への信頼があれば、周りの者と意見を交わし、活動が可能となる。さらに、学校内活動とは異なり、異学年や他学級など、面識のない生徒どうしが共に活動することも多くなる。それ故、密接な友人への心理的距離よりも、一般の他者に対する心理的距離の短縮が必要になる。よって他人への信頼があれば、特別活動に対して適応的な態度をとることができるのである。「学習への態度」には自己への信頼が影響しており、学習活動については、中学生は自分自身の問題として受け止めている。

各学年別に分析してみると、第1学年においては「進路意識」では自分自身への信頼が影響しており、進路とは自分の将来の夢、将来就きたい職業が具体的ではあるものの、どこか現実的ではない。第2、3学年になると、自分への信頼よりも他人への信頼が強く影響してくる。自らが思い描いていた将来像と現実とをマッチさせ、教師、親、友人などの周りからの進路情報も重要になってくる。進路は自分自身のことであるものの、他人の言動、情報を受け入れる必要が出てくることから、他人への信頼があれば進路に適応的になると思われる。「友人関係と態度」では、他人への信頼が大きく影響しているが、特に第2学年では顕著である。文部科学省の報告（2003）にもあるように、学校においての人間関係、特に友人関係につ

いては学校適応感との関連性が強い。学校適応感の分散分析では「友人関係と態度」では第2学年が低下し、第2学年での他人への信頼が「友人関係と態度」に大きく影響していることから、適応感において、また信頼感においても、他人への信頼はこの学年にとって重要であることは明らかである。

「教師との関係」においては、第3学年で他人への信頼が強い影響を及ぼしていることが解った。第3学年は進路を決定する学年であり、教師との面談などが多く、進路については教師、とくに学級担任に頼る部分がでてくる。それ故、教師との関係を良好なものにするためには他人への信頼が必要になる。

「特別活動への態度」については、第2、3学年で他人への信頼の影響が強くなっている。第1学年では環境が変化し、緊張感を持っているが、学年があがるにつれ自分たちで意見を出し合い、行動する場面が増えてくる。その中で、自分の考えを表出したり、行動化するには、他者との交わりが必要となり、お互いの心理的距離が問題になってくるであろう。他人への信頼を強く持つ生徒にとっては、緊張感もなく自己を開示して活動に参加できるが、他人への信頼が弱ければ、自己を表出することをためらい活動に消極的になってしまうだろう。

「学習への態度」は各学年に共通して、自分への信頼が影響している。特に第2学年が目立つが、小学生のころと比較して学習内容が難解になり、またテスト評価もリアルに出てくる。学習成績によらず、自分自身に確固たるものを持ちはじめた生徒が学習活動に適応できるようになると考えられる。各学年通してみると、必ずしも学齢が上がるにつれて影響力が強まるのではなく、学年の特性によって影響力があるものが存在することが分かってきた。特に第2学年については、注目すべきであると思われる。

中学生の持つ信頼感について検討した結果、「不信」、「他人への信頼」、「自分への信頼」の3つになることがわかった。性差については、「他

人への信頼」において、男子よりも女子の方が高かった。また学年差においては、「他人への信頼」において第2学年よりも第1、3学年の得点が高く、学校適応感全体得点と同様の結果となった。

信頼感が学校適応感のどの場面に影響を与えるのかを検討した結果、各学年において異なる知見を得た。天貝（1997）は、中学生において信頼感が学校適応感に及ぼす影響は対人関係的側面で、自己意識的側面には影響しないと述べているが、本研究では、中学生においても、信頼感が学校適応感の自己意識的側面にも影響することを示した。

## 【引用文献】

- 天貝由美子（1996）中・高校生における心理的距離と信頼感の関係。カウンセリング研究, 29, 130-134.
- 天貝由美子（1997）中・高校生の学校適応感と信頼感との関係。筑波大学心理学研究, 19, 1-5.
- 天貝由美子（2001）信頼感の発達心理学—思春期から老年期に至るまで—。新曜社.
- 本間友巳（2000）中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析。教育心理学研究, 48, 32-41.
- 石隈利紀（1999）学校心理学。誠信書房.
- 小泉令三（1995）小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討。福岡教育大学紀要, 44, 295-303.
- 牧昌見・高階玲治（1991）学校生活不適應の発見・予防と援助・指導。学研.
- 文部科学省（2004）平成16年度学校基本調査.
- 森田洋司（1991）「不登校」現象の社会学。学文社.
- 内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉令三（1985）高校生用学校環境適応尺度作成の試み。兵庫教育大学研究紀要, 7, 135-146.
- 猿渡功・佐藤広一・香妻幸子・有倉巳幸（2002）中学生の対人関係の希薄さに関する研究（2）—希薄さタイプごとの特徴に焦点を当てて—。日本教育心理学会第44回発表論文集, 238.
- 杉原一昭・天貝由美子（1996）特性的および類型的観点からみた信頼感の発達。筑波大学心理学研究, 18, 129-133.
- 田上不二夫（2003）対人関係ゲームによる仲間づくり—学級担任にできるカウンセリング。金子書房.

四杉昭康・加藤哲文（2003）構成的グループエンカウンターが学級集団に及ぼす学校不適應の予防的効果。上越教育大学心理教育相談研究, 2, 53-68.